論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（ 心理学 ）	氏名	木　谷　智　子
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

青年期における社会的自己の多面性とアイデンティティに関する研究

論文審査担当者

主　　査　　教 授　　岡 本　祐 子
審査委員　　教 授　　杉 村　和 美
審査委員　　教 授　　服 巻　豊

〔論文審査の要旨〕

本論文は， Erikson のアイデンティティ論の視点から，現代青年の社会的自己の多面性の特徴を検討したものである。青年期は，幼児期からの同一化によって形成されてきた複数の自己を統合し，一貫したアイデンティティを達成する時期である。しかし現代では，心理臨床実践の知見をはじめとして，状況や関係性において異なる多様な自己を統合せず，多面的な自己を持つ青年が存在することが指摘されている。これまで自己の多面性は，アイデンティティの未確立，主体性や自律性の未熟さと捉えられてきた。近年，多面的な自己を持つ青年は，アイデンティティが未発達な状態ではなく，場面によって異なる自己はすべて「本当の自分」である多元的なアイデンティティを有していると捉える視点もあるが，実証的な研究はほとんど行われていない。

本研究では，異なる自己を統合せず，複数のアイデンティティを有する在り方を「多元的アイデンティティ」，Erikson(1950)が提唱した役割間で自己が統合された一貫性のあるアイデンティティを「一元的アイデンティティ」と定義し，精神的健康，自我の自律性の視点から多元的アイデンティティの特徴を実証的に検討することを目的とした。

本論文は，以下のように構成されている。

第１章「本研究の背景と目的」では，第１節において，Erikson のアイデンティティ論と自己の多面性について本研究の理論的背景を述べた。第2～4 節では，現代社会における多面的な自己を持つ青年の特徴について，社会学，心理学の先行研究の知見をまとめ，第５節では，これらを踏まえて，本研究の目的を述べた。

第２章「自己の多面性と精神的健康，心理的 well-being との関連」では，第１節(研究 1-1)において，大学生 167 名に質問紙調査を行い，自己の多面性とアイデンティティ，精神的健康の関連を検討した。構造方程式モデリングによる分析の結果，自己の多面性から自己斉一性・連続性に有意な負のパスが，自己斉一性・連続性から抑うつに有意な負のパスが見られ，自己の多面性は，斉一性・連続性を混乱させ，精神的健康の低さと結びつくことが示唆された。第 2 節(研究 1-2)では，大学生 212 名 に質問紙調査を行い，自己の多面性と心理的 well-being の関連を検討した。相関分析の結果，自己の多面性と自律性には関連が見られず，自己の多面性は，自律性の低さとは直接関連しないことが示された。

第３章「自己の変化意識による青年の類型」では，第１節(研究 2-1)において，自己の多面性を持ちつつ，精神的健康の高さを有する青年が存在するという仮説を検証した。大学生 260 名 を対象に質問紙調査を行った。クラスタ分析の結果，場面によって自己が変化せず一貫している「自己一貫群」，自己の変化が抑うつに結びついておらず多面的な自己を有している「多面的自己群」，

場面によって自己が変容し抑うつの高い「抑うつ・変化群」の 3 群が見出され，自己の多面性が抑うつに結びつかない青年が存在していることが示された。第 2 節(研究 2-2)では，多面的でありつつも精神的健康を保っている青年（多面的自己群）のアイデンティティの特徴を分析した結果，多面的自己群は，抑うつ・変化群以上の斉一性・連続性の感覚と，一貫群同様の心理社会的同一性の感覚を有していることが示唆された。

第 4 章「現代青年のアイデンティティに関する質的検討」(研究 3)では，研究 2-1 において抽出された 3 群の特徴を，自己の多面性が精神的健康の低さと結びつかない理由やアイデンティティ感覚の差異から質的に検討した。研究 2-1 で面接調査への協力を得られた 19 名に対し，面接調査を行った結果，各群に以下の特徴が見出された。①「自己一貫群」は，場面によって自己を変化させない群であると考えられたが，彼らは，自らが自分らしく居られる場所を選択し，重要な他者との関係の中でアイデンティティを形成していた。つまり Erikson(1959)が述べたように，役割実験における適所の選択を行うことで，一元的なアイデンティティを形成していた。②「多面的自己群」は，社会的要請に応じて，社会に適応する形で自己を変化させる点が特徴的であった。自己一貫群と異なり，多様な場を自らの適所として認識し，主体的に自己を変化させることによって，社会的な同一性を確立していた。場面ごとの自分についてそれぞれ自分らしさを感じており，多元的アイデンティティを有していると考えられた。③「抑うつ・変化群」は，多面的自己群と同様に，社会的要請に応じて自己を変化させていた。しかし本当の自分は一つであるという認識があるために，多面的な自己が葛藤を生じさせ，アイデンティティ拡散の特徴を示していた。

第 5 章「総合考察」では，第 1 節で本研究の成果をまとめ，第 2 節において，本研究の限界および今後の課題について論じた。

本論文は，以下の 3 点において，高く評価することができる。

1. 現代青年の自己の多面性に注目し，多元的アイデンティティの存在を実証的に示した点である。これは，Erikson(1950)の提唱した一元的なアイデンティティ達成とは異なるアイデンティティの様態である。
2. 多元的アイデンティティ(多面的自己群)の特徴を実証的に解明した点である。彼らの斉一性・連続性の感覚は一貫した自己を持つ青年に比べて乏しいものの，心理社会的な同一性の感覚は十分に得ており，多様化した社会に合わせるために主体的に自己を変化させていた。つまり，自己の多面性を持ちつつも，抑うつ的にならない青年は，アイデンティティ形成の放棄・失敗と捉えるよりも，現代社会に応じた多元的アイデンティティを形成していると捉えるのが適切であるという，新たな解釈可能性を示した。
3. 多元的アイデンティティを持つ青年とアイデンティティが拡散している青年(抑うつ・変化群)の「本当の自分」の相違を検討することにより，自己を統合できず，抑うつ的になっている青年への支援として，本当の自分イメージを変容させるという臨床的，教育的支援の方向性を示唆した点である。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30 年 2 月 7 日